

見えぬものこそ、見てみよう

橋本 佳澄（兵庫県 会社員）

●国際協力活動について、海外派遣前に抱いていた印象や考え

アフリカ。この言葉から、皆さんは何を想像しますか？

地平線は遙か遠くに霞み、ゾウやキリンがサバンナを闊歩し、子どもも大人もほぼ裸で、皆食べ物に困っている——多少なりとも、そんなビジョンが浮かぶ方が多いのではないのでしょうか。私もその一人でした。今回の派遣国であるエチオピア。アフリカ大陸にあるというだけで、私は、「かわいそうな貧しい国」という勝手なイメージを抱いてしまっていました。そして、「だからこそ、日本が支援の手を差し伸べるべきなのだ」とも。

しかし、そんな単純な考えは、到着後すぐに崩れ去りました。日本から約24時間かけて来た私が目にしたものは、ごくありふれた「普通の」国の光景だったのです。道路は舗装され、たくさんの自動車が行き交っています。キリンの代わりに、あちこちでコンクリート製のビルがよきによきと頭をのぞかせています。街中の人は色とりどりの服を着て、気さくに話しかけてきます。スーパーに行けば買えない物はありません。それもそのはず、この国は2011年まで8年間連続2桁の経済成長を成し遂げるほど、急激な発展を遂げている国なのです。「アフリカ=かわいそう」という図式は、私の一方的な思い込みには過ぎませんでした。エチオピアは、これからの成長を予感させる生命力に満ち溢れた、とてもエネルギッシュな国でした。

●国際協力活動についての帰国後の考え

では、エチオピアになぜ支援をする必要があるのでしょうか。もちろん、この国は決して豊かではありません。高層ビル群の足元にはバラックが這いつくばるようにして広がっていますし、一歩ホテルの外に出れば汚れた服を着た靴磨きの少年たちが追ってきます。郊外には何も無い平野が広がり、まだまだ国土の開発が進んでいないことがうかがえます。

しかし、それは決して最悪の状況ではないのです。多くの人が生死に関わるほど飢えているわけではありません。ましてや、紛争地帯でもありません。街は平和そのものです。何より、エチオピアに暮らす人々の陽気さが私に違和感を抱かせました。まるでこの現状を受け入れ、満足しているように見えたのです。日本に比べればはるかに貧しいけれど、ある程度安定してはいる。おまけにそこに生きる人たちが特に不満を抱いていない…このような国に、なぜ日本はODA支援をしているのだろうか？そんな疑問を抱えながら、視察先を回りました。4日間かけて7つの案件を見て、そこで働く人たちの話を聞くうちに、エチオピアに欠けているものがだんだん見えてきました。この国には「見えない」ものが足りていないのです。そして、それを埋めることができるのは日本の支援なのだという事。

見えないもの1「精神」

エチオピアの首都アジスアベバから、隣国ジブチの港をつなぐ国道一号線。その大動脈に日本のODAにより橋を架けるプロジェクトが進行しています。場所はアワシュ川という急峻な渓谷。ここに橋がなければ、ジブチへの輸出入がストップし、エチオピアは危機に陥ってしまいます。もちろん、こんな重要な場所を、他の国が放っておくはずがありません。実際訪れてみると、日本以外にもイタリア製の旧橋・中国製の鉄道橋が架かっていました。「既に他国の橋があるのに、日本が架ける意味はあるのだろうか？」そんな疑問をぶつくと、佐藤工業のTさんは谷底を指さして答えました。

「あちらのほうにコンテナが転がっているのが見えます？あれは中国が橋を建築中に残して行ったものです。私たちは、ただ橋が出来たらいいやとは考えていません。建築中は周囲の環境に配慮しますし、廃棄物を現場に投棄することもしません。完成後も、エチオピアの厳しい気候に耐えうるよう、頑丈なコンクリート製の橋を架けています。整備も最小限で済むので、100年先だって使えるんですよ。」

クリーンな現場、建築後のことまで踏まえた高い質、そして安全性。日本から遠く離れた地球の裏側とは思えないほど、徹底した安全管理のもとアワシュ橋は建築されていました。ちなみに、このプロジェクトではエチオピアへの技術移転のために現地の人が多く雇用されているそうです。知識だけでなく、日本のモノづくりにかける堅実なマインドもきっと彼らに伝わっていくでしょう。

見えないもの2「意識」

日本では一日に24時間使えるものが、エチオピアではたった14時間だけ。一体これは何の数字でしょうか？スーパーが開いている時間？インターネットが通じる時間？実はこれ、アジスアベバ市内の平均給水時間ともいわれています。この比較でもわかるよ



エチオピアの幹線道路の様子



アジスアベバ市内の様子
(左手奥に見える高層ビルはアフリカ連合(AU)本部)

うに、この国の水道事情はかなり劣悪です。断水は日常茶飯事ですし、せっかく供給したきれいな水も盗まれたり、漏れたりして40%は失われてしまいます。こんな問題が山積している水道局に、日本から2人のシニア海外ボランティアが派遣されています。彼らはきれいで安全な水を届けようと日夜努力を続けていますが、なかなか上手くいきません。「エチオピアの人々に、この状況を変えたいという意識が欠けているからだ。」シニア海外ボランティアの一人、桑田さんはそう仰いました。水は止まって当たり前のも、まだ動くのだからメーターの修理はしなくてよい、トイレは1つでも使えるものがあればOKじゃないか…。

日本人の我々には信じられないことですが、エチオピアではそれらは全て「当然」と受け入れられてきたことばかりなのです。当たり前と思われていることを指摘して、改善していくことは本当に困難です。それが異国の価値観ならなおの事。彼らシニア海外ボランティアも、その認識のギャップに悩んでいました。問題を問題として意識してもらえなければ、解決への道も望めません。この「問題意識の低さ」には、現地の学校に体育隊員として派遣された北島隊員も苦しんだそうです。彼の仕事は、現地の子供たちに体育を教えることです。体を動かす楽しさを知れば、運動能力だけでなく健康への意識も向上します。体育は子どもの発達過程において非常に大切な科目なのです。しかし、彼の派遣先の学校には、グラウンドがありませんでした。これはある意味当然のことでした。エチオピアには「体育」がないのです。この国には体育を実践して学ぶという習慣がなく、保健体育のような座学が主流となっています。児童にとって体を動かすことの必要性を、学校側は認識していなかったのです。そのため、学校にあったのは、荒れ果てた空き地だけ。棘の生えた低木が生い茂り、雑草は腰の高さまで伸び、あちこちに石が転がっている。初めは、とても体育の授業ができる場所ではなかったそうです。けれども、彼は諦めませんでした。抜いても抜いてもしぶとく生えてくる草を抜き、土を均し、一年掛かって学校の裏にグラウンドを作り上げました。子ども達は大喜びで、馬跳びやかっこなど外遊びを楽しんでいるそうです。

また、生徒たちがより効率よく運動を楽しめるよう、それまで無かったカリキュラムも自分で作成したところ、他の教員たちも真似をして作るようになったと、北島隊員は嬉しそうに教えてくれました。問題を見つけ、それを解決しようと必死に動いた北島隊員のその姿勢が、周囲の人々を変えていったのです。

物的支援に頼らない「精神の支援」

「ODAによる支援」と聞くと、私たちはその実績に目を向けがちです。もちろん、支援国にどれほどの効果があるのか客観的なデータに基づいて判断するのは大切なことです。しかし、本当に目に見える結果だけが日本の支援の全てでしょうか。

今回の視察を通じて、私は、日本の「考え方」の姿勢を伝えることこそ、日本にしかできない支援の形であり使命なのではないかと思いました。ただモノを作って終わり、人を派遣して終わりではなく、それを通じて日本式の実直な改善の精神が伝わっていくことこそ肝要なのだと思います。支援は無限に続くわけではありません。いつか自立の時が来ます。エチオピアがいくら様々な国からの支援物資で溢れても、それはあくまで外見でしかありません。そこで暮らす人々に「現状をよりよくしよう」という気概がなければ、いずれ支援頼みの発展は終わってしまいます。エチオピアの人々が自ら思考し、自らの手で選択を行い、結果としてより良い国を作り上げていく——自助努力のためにも、この日本式の考え方を根付かせていく必要があります。何もない戦後の荒廃の中から、日本は「考えること」で経済発展を遂げました。自然資源に乏しいエチオピアも、かつての日本と似た状況にあると感じます。そのためにはこのような意識の改革を図っていくことは重要なのではないのでしょうか。

●日本の皆さんに伝えたいメッセージ

精神や思考といったものは目には見えず、不確かなものです。その反面、物質に頼らないため、その可能性は無限です。壊れて使えなくなることもありませんし、特定の人間に限らず、皆で共有できます。物的支援もしつつ、内側からの意識改革による支援ができるのは日本だけなのではないかと、視察を終えて思いました。私たちは、ついつい自分の目に映るものが全てと考えてしまいます。例えば、テレビでアフリカの飢餓や感染症について報道されれば、アフリカ全てがそうなのだというネガティブな先入観を抱いてしまいます。けれども、それはただ一つの側面に過ぎません。

珈琲を飲む町の人、笑顔で手を振る子供たち、荷台を引くロバ、熱気溢れる市場。これらエネルギーと明るさに満ちた光景も、全て等しくアフリカの中にあるエチオピアの姿なのです。行かなければ、自分の目で見なければ、私は一生考えもしなかったでしょう。ODA支援についても、私は支援結果のグラフと数字を見ただけで理解したつもりになっていました。その向こうにいるはずの、エチオピアで働く日本人の姿や、その信念について、想像したこともありませんでした。

しかし、例え見えなくとも、エチオピアで必死に活動している日本人はたくさんいます。そして彼らの一人一人が信念を持って、エチオピアのためになることを常に考え行動しているのです。そのことに思いを巡らせてみれば、例え見えなくとも、ほんの少し、アフリカが近くなったと思いませんか？



北島隊員（右端）と、彼が整備した運動場



アフシ橋の工事現場に設置されていた注意喚起を促す看板